

ブータンから考える「地方創生」

昨今、大きな教育課題の一つが「地方創生」。都市と地方の経済格差をなくし、日本全体の国力を高めることを目的とした政策なわけですが、資本主義は「常に利潤を獲得するための外部を要求する」のだから、地方全部が潤うことはそう簡単な話ではない。

さて、2011年にご成婚したばかりの国王と王妃が来日され、東日本大震災の被災地を訪れたことで一躍有名になったのがブータン。2013年には、発展途上国ながら幸福度ランキング8位になり、「世界一幸せな国」として広く知られたが、2019年には95位、その後はランキングすらしていない。ブータンも近代化が進み、他国の情報が入るようになり、国民の幸せへの意識が変わったとか、近代化が穏やかな生活やそれがもたらしていた幸せを奪ったとか、さまざまな説がある。

ところで、当時、評判になった映画が「ブータン 山の教室」（2019年公開）。電気も携帯電話もない村に来た青年教師と子どもたちや村人との交流を描いているが、その宣伝コピーは、「グローバル化が進み、世界が単一化する今“本当の豊かさ”を考えさせる」だった。だが、映画を見て、「都会」と「田舎」、「便利」と「不便」といった二元論で「豊かさ」や「幸せ」を語ることを無意味に感じたことを記憶している。田舎だから無条件に「いいね！」を押したり、都会は「東京砂漠」だとむやみに嘆くわけではありません。（ちなみに「東京砂漠」は内山田洋とクールファイブのヒット曲のタイトルです）だいたい、田舎に幸せがごろごろ転がっているわけでもないし、いい人ばかりのはずがない。実際、映画の中でも目がキラキラしている（このキラキラは「推し」です）学級委員のベム・サムのお父さんはギャンブル好きの飲んだくれでした。ともかく、ストーリーらしいストーリーはないのですが、村人は「先生は未来に触れることができる人」と敬意を表し、子どもたちは純粋な好奇心を持って学ぶ。その中で、自分の部屋の風よけの紙（なければ寒さでじっとしてられない様子）を細かく切り、紙を持たない子どもたちにノートとして配るシーンに、映画の主題が表れていると思います。それは都会ではダメ教師だった主人公が、「利他」に目覚めた瞬間でした。教育現場で地方創生のために大切になるのは、この「利他」の気持ちをどれだけ子どもたちに持たせるかではないでしょうか。都会でも地方でも、「利他」の気持ちを育てることはできるわけです。

「利他」についてつけ足しますが、フィンランドの哲学者、フランク・マルテラ氏によると、自分のためでなく他人のためにお金を使うと、血圧が下がり、幸福感が高まることなどが米国やカナダで行われた実験で証明されたとのこと。また、配偶者の介護に週14時間以上を費やしている人は寿命が延び、ボランティアする人はより長生きするとも言っています。（九州大学名誉教授の外須美夫氏はAIに仕事を奪われる人として「カネもうけ主義の人たち」を挙げていますが、このことについては後日書きたいと思います。）

思いつくまま書いてみましたが、最後に、「今日の言葉」は「あまちゃん（2013年放送。BSで再放送中）」での小泉今日子さんのセリフです。（ちなみにこの締め方は、FMで放送中の村上春樹氏の「村上RADIO」のパクリです。）「私が田舎を嫌いなのは、さびれているからじゃなくて、さびれていることを気にしているからなの。（中略）そんなに卑屈にならなくても、良かない？」。さすが、キョンキョン！素敵です。

令和5年8月1日 大村城南高等学校長 中小路尚也